

奇妙な味わいの缶詰め

ひらそん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ここは不思議な味の専門店。

目次

ゴーストライター	1
逆流	7

ゴーストライター

このエンターキーを押した瞬間に俺はまた金持ちになれると思う。同時に名誉も手に入ると思う。なんでかって言われたら世間にウケる自信があるからさ。

そうすればまた病気になった田舎のおふくろにも親孝行ができる。きつとおふくろはまた泣いて喜ぶだろう。涙脆い人だからなあ。

なんで早く押さないのかって？

まあ落ち着けよ、これには深い理由があるんだ。どうせお前に教えられた所でも変わらないし聞きたきゃ話してやるよ。俺も話せば少し気持ちが軽くなるかもしれないしな。

俺が最初にエンターキーを押したのは3年前の7月。俺は元々売れない作家でね、3年前に死んだおやじには物書きになると言った瞬間から真っ赤な顔して猛反対されたんだ。

親戚にも嘲笑されて仕方なく一般企業に就職しようと考えた時におふくろだけはこの子は絶対売れるから作家にすると行って聞かなかった。

そして俺はある時には自由奔放に旅をして物書きの材料を集めて、ある時には実家に缶詰めとなり小説を書き上げた。編集長のデスクまで行くと仕方なく面接室に通してくれた。しかしまあ出版社は血も涙もないね、原稿を流し読みしてすぐに返されたよ。アシスタントがお茶出してる間に返ってきてコメントもなし。酷いだろ？

そこからはもうシナリオもレトリックも何もかもに自信がなくなっただけ。6月の第1週の月曜の夜行で田舎を飛び出しちゃった。

そのうちおふくろは病気になっちゃった…

連絡が入っても帰れなかった…

俺を信じ続けてくれたおふくろを俺は裏切ったんだ。もつと言っでしまえばいくら息子とは言え他人を信じ続けたおふくろに対して俺は自分ですら信じられなかったんだ。

そんな弱い所を晒したのに帰れる訳ないだろ…

おっと、エンターキーを押す話だったな。

おふくろの事が重なり更に物書きが出来なくなった俺の所にあいつは現れた。それが7月だ。カフェのテラス席で暑さに耐えながらどうにか頭を捻ろうと悩んでいた所にいきなり現れ俺のパソコンにファイルを送ってきてこう言ったんだ。

「このファイルを出版社に送ったら3万円をあげよう、ついでに君が〇〇出版社に弾かれた小説ももう一度出版を検討して貰うように話を通してあげよう。」

夢のような話じゃないか、中折帽にサングラスにマスクとかなり胡散臭かったけどそいつの名刺には〇〇出版社と書かれていた。

試しに出版社に連絡をするとそいつは確かに存在していた。

その日の夜にファイルを送信してみた。

恐らくエンターキーを意識して押したのは人生初だったと思う。

15分後に電話が鳴った。

おふくろが倒れた旨の連絡は手紙できたから東京に移り住んでから電話が鳴ったのは初めてだった。相手は〇〇出版社の奴だった。

今の原稿を是非出版させて欲しいとの電話だった。昼間のあいつがあのだと弾かれた小説に鶴の一声を足してくれたのだろうか？俺は心底喜んで二つ返事でOKを出した。

ようやくおふくろに合わせる顔ができた。

しかし後日出版社で見た自分の小説にとても驚いた。

全く書いた覚えのないストーリー。

しかし相手はひとりで話を進めて印鑑を迫って来た。俺は驚きながらも印鑑を押した。

よく分かってはいなかったがこれはチャンスだと感じた。ここで自分の名前で小説を出せなければきつとこれから先も無理だ。病気のおふくろはいっ死んでもおかしくない。信じてくれたおふくろに恩返しを、裏切ってしまったおふくろに詫びを。

二ヶ月後に俺の小説は世に出た。

そして例の出版社が前面に出して宣伝したお陰か、俺は画面越しで全国のお茶の間にその存在を示す事となった。あの日は忘れもしない、中秋の名月だった。

どこから電話番号を入手したのかは分からないがおふくろから電話がかかってきたのだ。

おふくろは泣いていた。片田舎から東京まで電話を通してだが。

—むしろその方が表情は綺麗に分かった—

こうしてとうとう俺は引き返すことが出来なくなった。あいつからはまた頃合を見計らってやるとだけ手紙がきた。手紙は封筒に入っていて3万円も入っていた。

年末、俺はラップトップを立ち上げて遂に送信したファイルの中身を確かめる決心をつけた。

中身はあの小説だった。

あの日俺は自分の才ではないものを着用してしまったんだ。とても後悔してすぐに出版社に連絡を取ろうとしたがいつも邪魔してきた俺の弱さが止めた。俺がここで言うてしまったらおふくろはとても苦しむだろう。病気で弱っているのにこれ以上絶望を与えてしまったらどうなってしまうだろうか。考える事すら恐ろしかった。これ以上裏切りたくない。そうして俺はおふくろに最大の裏切りをしてみました：

年が明けて桜の蕾がどうこう騒がれてきた季節。あいつからファイルが来た。

中身は見ずにエンターキーを押した。二度目の恩返し、そして裏切り。

今度の封筒には3万円だけが入っていた。

こんな調子で一年に二回のペースで俺は功罪を同時に手にしてきた。

表面上で順調に進んでた俺の小説家人生をこうやって考え直しているのは去年おふくろのお見舞いに行ったのが原因なんだ。

金を持て余して俺は開業したての新幹線で実家まで行った。「境界の長いトンネルを抜けると雪国だった」とは上手い言い回しだと思った。

産まれてから故郷の雪国でしか生活せず上京した時は逆方面だったからいきなり雪が出てくるという現象に出くわしたのは初めて

だった。

こんな不正に塗れた俺の中にも本物の小説家を志す心は残っていたように俺のコートの胸ポケットには手帳が入っていた。

すかさず文字を書くところを面白いうようにスラスラ書けた。あんな誰が書いたか分からない器用な小説よりずっと胸を張れるモノを書けた。

やがて新幹線は周りに白銀のカーペットしか敷かれていない駅に着いた。

私はいかにも高そうなキャリアバッグの柄を持ち閑散としたホームに降り立つ。

背後のドアは空気の抜ける音を出して閉まると重そうな鋼鉄車体にしては軽々しい音で滑って行きやがてホームから去った。

まるで後ろにスキーヤーがいたかのように：

駅前のロータリーでタクシーを拾いおふくろの入院している病院へと向かわせる。

タクシーを転がす運転手はニコニコしている田舎らしいおじいちゃん。

俺は夢中でさつきから書いている小説の続きを書いた。

おじちゃんは「あんだどつかで見た顔だねえ」と言っただけ何も言わなかった。

小説が書けるほど優しい運転をしてくれたおじいちゃんは俺のキャリアバッグをトランクから出す時に一冊の本を持ってきた。

俺の名前が書かれた小説。

サインをしろということらしい。

特に悪い気はしなかった。なんの感情もなく書き終えらるとつくり笑顔で「次回作にご期待ください、次回は一番の傑作にする予定ですよ」と冗談半分に言った。

おじいちゃんは馬鹿笑いしてタクシーに乗り込み去ってしまった。

その直後さつきの発言にはっとした。

冗談混じりであったが確かに俺は傑作にすると聞いた。持っている手帳に目を落とす。なんだかよく分からないがやる気

が出てきた。

病院の受付に行くとき名前を書かされ「403号室です」とだけ無愛想に言われた。

内装もところどころペンキが剥げており、おふくろをこんなクソ病院じゃなく都内の病院に入院させてやろうと思った。

エレベーターが無かったので仕方なく階段で4階に行く。あの時息が切れていたのは運動不足だけが原因ではないと思うが運動しないとなあ。

403号室の窓際のベッドにおふくろは居た。

かなり痩せ細って顔色が悪いけどあの人は確かにおふくろだった。俺はおふくろの前で泣くことは無かったのだが今回ばかりはおふくろの涙にもらい泣き。成人してから結構経つのに情けなかったよ。

でも本当に情けなかったのは自分の才ではないこと。

俺は嘘で塗り固めた生活をおふくろに話しておふくろに都内の病院に転院しないか訊いてみた。

そしたらおふくろは俺に引越すように言ったんだ。

充分売れたんだからもうこっちでゆつくり書けと言ったんだ。

さつき医者からこっさりお母様は先が長くないと言われたが首を縦には振れなかった。

俺にはおふくろの願いを断つてもしないといけないことがあるんだ。埋め合わせ。

一泊した後におふくろに別れの挨拶をして新幹線で東京へ戻った。帰るといつものファイルが送られてきていたが予定の日には提出しなかった。

慌ててあいつは俺の家に訪ねてきた。

俺はもう送られたファイルを出すつもりはないという事と自分の書いた小説を出させてくれないかと頼んだ。

するとあいつは全てを話すと言ってサングラスとマスクをとった。

あいつの正体は面接室でお茶出しをしたあのアシスタントだった。

あいつは俺の小説をあの場合で見えていたようで俺に才能を感じたらしい。

いつか俺に本当の小説を出して欲しくてこんな事をしたらしい。
最後にあいつはこう言った。

「次に出す小説は貴方の書いたもので構いません。」

「表現技法などが今までと違うと読者は別人が書いたと感づく可能性があるがあるのでそこはよく考えてからご提出ください。」

そうして約半年が経った。

読者は段々と私がスランプに陥ったと思いはじめているようだった。

私は今とあるラップトップの前にいる。

目の前にはファイルの送信画面。

エンターキーを押せばこのファイルは出版社に送られる。

中身は自分しか知らないもの。

これを押せばきつとみんなが驚くような完成度の小説が世に放たれる。

誰もが才能を感じるだろう、自信があるんだ。

しかし今まで積み上げてきたものが崩れるかもしれない。

さあ、君ならどうする。

逆流

駅前ビルの2階の喫茶店から下を眺めると安心できる。

今横断歩道を渡るカップルはいい家庭に生まれ、たまたま人生が上手くいっただけの奴ら。

今タバコの自販機の横で座り込んで大声で電話をしている金髪は義務教育すらまともに受けてこなかったのだろう。今更戻れない道をはなから諦めて暗がりでも何もしていないだけ。

今深夜の歩道をとぼとぼ歩いている中年のサラリーマンはどこかで踏み外した負け組。

そうしているうちに世の中はクズで溢れているという事実にくづく。

そうして安心するだけの僕はクズ。

これまでの人生を振り返ると僕は今まで眺めてきたどのクズよりもクズかもしれない。

努力もできず中途半端に手堅い人生のレールに拘り、しがみつく。でも上り勾配は苦しくて登らない、登ろうとしない。

高校もそうだった。それなりの高校に行き留年はしないように眠りながら授業に出席。テストは再試をアテにして乗り切る。

僕の人生はいつまでも平坦。いつか本気を出して道を開く。でも実はこの道は下り坂になっていて気づかないまま目指すところまで登れないところまで来ている。

平坦な僕に一発逆転を起こす様な切り札はない。

特に何かを考えた訳でもないが喫茶店が不快になったから会計を済ませて逃げるように出てきた。

まるで人生の上り坂から目を逸らすかのような逃げ方。

駅前は売れないアーティストの展覧会。

自分の才能を過信しいつか売れると信じ続けて今日も歌い続ける。今日も描き続ける。毎日努力をしている。

荒が目立つギターが今日は一層不快である。

田舎に行こう。

その場で思いついた事だがすぐに財布の中から少ない金をすくい取り田舎へ向かう片道切符を購入する。

無論新幹線に乗る金などない。あと2時間後に出る夜行快速。

僕は夜行快速の始発駅へと向かうべくホームへの階段を降りようとする。22時過ぎだというのにサラリーマンの波がホームから押し寄せる。立ち向かう僕はとうとう踏み出す勇気を手に入れたのだ。やっとの思いでホームにたどり着く。

いくら都市部と言えど深夜帯の電車の本数はだいぶ少ない。

次は10分後のようだ。その次は通過と出ている。

夜のホームは帰宅するサラリーマンが降りるタイミング以外はただただ自動放送が鳴り響くばかり。地面はLED照明が無駄に明るく照らしている。

少し暗がりになっっているホーム端のベンチに座り込む。

よくよく考えるとさっきの僕の逆流した時の自己肯定感は何だったのだろう。社会に順応した人の流れに歯向かい新たな可能性を探すと言えば聞こえはいいが結局のところ僕はまたしてもみんなが登っている階段を登るのを拒んだだけなのではないだろうか。

そんな目の前を横切るのは22時過ぎの普通列車。

短い4両編成だったから僕の前に電車の扉は来なかった。